

ジャパンカップ出走予定外国馬プロフィール

◆ ウェイトゥパリス(WAY TO PARIS) = フランス

牡 7 歳・芦毛(イギリス産・2013 年 4 月 13 日生まれ)

父:Champs Elysees = 母:Grey Way(母の父:Cozzene)

馬主 : パオロ・フェラーリオ

調教師 : アンドレア・マルチアリス

騎手 : ミルコ・デムーロ

通算成績: 全 36 戦 7 勝、2 着 10 回、3 着 4 回

総獲得賞金: 約 8,050 万円

主な戦績: '20 サンクルー大賞(仏 G1)	1 着
'20 シャンティイ大賞(仏 G2)	1 着
'19 モーリスドニョイク賞(仏 G2)	1 着
'20 ガネー賞(仏 G1)	2 着

ウェイトゥパリスはグランディ・ブラッドストックの生産馬で、1 歳時の 2014 年 10 月にタタソールズ・イヤリングセールに上場されて 5 万ギニー(当時約 910 万円)でアンビション・スタッド・パートナーシップが落札。イタリア人オーナーのパオロ・フェラーリオ氏の競馬法人である“スクーデリア・フェルト”名義で、イタリアのアントニオ・マルチアリス厩舎からデビューしました。地元イタリア・ミラノを中心に競走生活を送った後、4 歳春にアントニオの息子でイタリアからフランスのシャンティイ調教場に本拠を移したアンドレア・マルチアリス調教師のもとに転厩して今に至っています。

ウェイトゥパリスの血統は、父シャンゼリゼ(父デインヒル、母ハシリは 5 頭の G1 産駒を輩出)が 2009 年のカナダ年度代表馬でカナディアンインターナショナルなど北米で G1 を 3 勝。母グレイウェイはリディアテシオ賞などイタリアで 5 勝を挙げ、ウェイトゥパリスの他に伊 G3 アンブロジーアーノ賞勝馬チーマデプリエイ(2007 年生、父シングスピール)、伊 G1 共和国大統領賞連覇のディスタントウェイ(2001 年生、父ディスタントビュー)を送り出しました。ウェイトゥパリスの芦毛は、グレイソヴリン系の名種牡馬で日本でもアドマイヤコジーン、ローブデコルテの父としても知られる母の父コジーン(その父カロ)から受け継いだものです。

父のシャンゼリゼ、母グレイウェイから連想されて「パリへの道」と名付けられた、ウェイトゥパリスの競走馬としてのキャリアは 2 歳の 10 月にスタート。サンシーロ競馬場の芝 1,700m 戦は勝馬から 10 馬身以上遅れた 4 着(8 頭立て)というほろ苦いものでした。2 歳戦はこの 1 戦のみ。

3 歳を迎えたウェイトゥパリスは 3 月にサンシーロ競馬場の芝 2,000m 戦で初白星を挙げて、その年は 5 戦 3 勝。ともに不良馬場で行われた 2,000m のリステッド競走を 2 勝して、6 月のイタリア大賞(サンシーロ、伊リステッド、芝 2,400m)ではイタリアダービー 3 着馬のフルドラゴに 1 馬身半差の 2 着に健闘しました。

4 歳時は 3 月の条件戦(サンシーロ、芝 2,000m)から始動して 3 着に入ると、続く条件戦(同、芝

2,400m)を優勝。通算 4 勝目を挙げました。これを最後に父の厩舎から息子のもとに移籍していよいよ重賞戦線に挑みます。デビューから 9 戦目にして最初の重賞挑戦は、5 月のエドヴィル賞(サンクルー、仏 G3、芝 2,400m)。ピエールシャルル・ブドー騎手で勝馬のティベリアンから 2 馬身 3/4 馬身差の 3 着でした。2 着馬はのちにブリーダーズカップターフを勝って日本に種牡馬として輸入されるタリスマニックです。6 月以降も G2 を 4 戦して勝星はありませんでしたが、6 月のミラノ大賞(サンシーロ、伊 G2、芝 2,400m)と 9 月のフェデリコテシオ賞(同、芝 2,200m)でともに 2 着。勝ったのは宿敵のフルドラゴでした。

5 歳になった 2018 年から、鞍上は 1 戦を除いて今年初戦までクリスチャン・デムーロ騎手に固定されます。この年は重賞ばかりを 8 戦して勝鞍はなし。ヴァルトガイストから 1 馬身半差 2 着となった 5 月のエドヴィル賞(パリロンシャン)が目立つ程度でしたが、馬名に込められた想いもあって秋の G2 フォワ賞(同)4 着をステップに、G1 凱旋門賞(同)に送り出しました。ジェラルド・モッセ騎手を背に、結果は勝ったエネイブルから 5 馬身 3/4 差の 11 着でした。

6 歳の昨シーズンは 8 戦して 1 勝、2 着 3 回。途中から長距離にシフトしたことが奏功し、シーズン 3 戦目のバルブヴィル賞(パリロンシャン、仏 G3、芝 3,100m)でオールタジグリーンの 2 着、続くヴィコンテスヴィジエ賞(同、仏 G2、芝 3,000m)もコールドトゥザバーの 2 着に入り、7 月のモーリスドニョユ賞(同、芝 2,800m)で待望の重賞制覇を飾ります。ラチ沿いの 3 番手を進み、直線入り口では前が塞がりませんが、一瞬の隙を突いて抜け出しを図り、最後は前年のメルボルンカップ 2 着馬マルメロとの競り合いをハナ差制しました。

夏場を休養に充てて 9 月のフォワ賞で復帰。ここでは後の凱旋門賞馬ヴァルトガイストに 2 馬身差の 2 着と悪くない競馬をしましたが、この後は再び距離を伸ばしてカドラン賞(パリロンシャン、仏 G1、芝 4,000m)とロワイヤルオーク賞(同、芝 3,100m)を転戦しましたが、前者で 6 着、後者も 5 着に終わって軌道修正を求められることとなります。

今年に入り、再び 2,000m から 2,500m の中長距離路線を選択した陣営は 3 月のエクスピュリ賞(サンクルー、仏 G3、芝 2,000m)から始動させます。ここは 6 着となり、クリスチャン・デムーロ騎手の騎乗はここまで。ブドー騎手に鞍上を替えて臨んだ 5 月のアルクール賞(パリロンシャン、仏 G2、芝 2,000m)はシャーマンに 3/4 馬身差の 2 着。徐々に調子を挙げたウエイトウパリスは中 2 週と間隔を詰めて、新型コロナウイルスの流行によってシャンティイからドヴィル競馬場に舞台を変更して行われたシャンティイ大賞(仏 G2、芝 2,500m)に向かいます。後方 2 番手に控えたベテランの芦毛馬は、直線で馬群から抜け出すとライバルに 4 馬身半差をつけて圧勝。2 つ目の重賞タイトルを掴みました。2 着馬は前年のベルリン大賞の覇者フレンチキングでした。

この勝利で勢いづいたウエイトウパリスは、前走から中 1 週ながら 4 度目の G1 挑戦となるガネー賞(シャンティイ、仏 G1、芝 2,100m)に臨みます。5 頭立ての 2 番人気で出走したウエイトウパリスはスタートで遅れて最後方を追走。直線に入ると先に抜け出したソットサスを猛追しましたが、僅かにアタマ差及ばず 2 着。勝馬の鞍上はかつての相棒であるクリスチャン・デムーロ騎手でした。

再び中 1 週で向かったサンクルー大賞(仏 G1、芝 2,400m)も 5 頭立て。いつものように後方待機から徐々に進出するとゴール前で 3 頭が並ぶ激戦を制して優勝。単勝 2.2 倍の人気に応え、デビューから 34 戦目にして待望の G1 タイトルを手に入れました。良馬場の勝ちタイムは 2 分 29 秒 9。クビ差で 2 着にナガノゴールド、さらにアタマ差の 3 着は前年のこのレースで 2 着のジャードでした。この勝

利によってジャパンカップ参戦を視野に入れたウエイトゥパリスは、2 度目の凱旋門賞挑戦に向けて休養に入ります。

9月13日のフォワ賞はスタート直後にナガノゴールドにぶつけられる不利があった中、6頭立ての4番手を進んで直線を迎えますが、最後の200mで伸びを欠いて勝ったアンソニーヴァンダイクから3馬身1/4差の5着でした。続く凱旋門賞は11頭立ての8番人気(現地、日本では9番人気)。ブド一騎手が上位人気のペルシアンキングに騎乗したため、ここはイオリッツ・メンディザバル騎手に替わりましたが、競馬ぶりは変わらず、内ラチ沿いに馬群後方を追走。直線を向いて最内に進路を取りましたが、重い馬場を伸びきれず同じく後方からの競馬となったディアドラ(8着)にハナ差の9着に終わりました。勝ったのはガネー賞でアタマ差まで迫ったソットサスでした。

これまでに挙げた7勝の内訳は2,000mで3勝、2,400mで2勝、2,500mと2,800mで各1勝。左回りのサンクルー競馬場では5戦1勝、2・3着各1回。良馬場と稍重馬場では18戦5勝、2着6回、3着1回の一方、重と不良では18戦2勝、2着4回、3着3回。芝2,400mの持ち時計は昨年9月のフォワ賞でヴァルトガイストの2着に入った時の2分27秒8(良馬場)です。なお、ウエイトゥパリスはジャパンカップが現役最後のレースとなり、来年からはアイルランドのクーラゴン・スタッドで種牡馬となる予定です。



Photo by Scoopdyga
2020年サンクルー大賞(仏G1)

ジャパンカップ出走予定外国馬関係者プロフィール

■ ウェイトゥパリス (WAY TO PARIS)

● 馬主：パオロ・フェラーリオ (Paolo Ferrario)

1927年生まれの93歳。父は1954年に“スクーデリア・フェルト”を設立し、1969、70年のローマ賞を連覇するなど競走馬として活躍した後、日本に種牡馬として輸入されたバクーコウなどを所有。本馬の調教師の父アントニオとは、彼がスクーデリア・フェルトで長らく調教師を務めたマリオ・ベネッティのもとで見習騎手をしていた頃からの付き合いで、その推薦で本馬を購入し、彼の厩舎へ預託しました。

地元のミラノでも所有馬を預託する一方、近年のイタリア競馬の低迷もあり、アンドレア・マルチアリスがフランスに拠点を移したのを機に、本馬を移籍させるなどフランスでも競走馬を所有、出走させています。なお、本馬の所有名義は2017年に、スクーデリア・フェルトから個人名義に変わりましたが、パオロ・フェラーリオ氏はイタリアで最も高齢の馬主とされています。

● 調教師：アンドレア・マルチアリス (Andrea Marcialis)

1983年5月23日生まれ、ミラノ出身。騎手から調教師に転身した父の足跡を追うように騎手になった後、イギリス・ニューマーケットのマイケル・スタウト厩舎などで研鑽を積み、調教師の道を歩みます。最初はミラノを拠点にしますが、それから間もない2017年3月にフランスで正式に免許を取得。当初はシャンティイの厩舎に僅か4頭の管理馬しかいない状態でしたが、昨年はG3 サンジオルジュ賞、本馬によるG2 モーリスドニオイユ賞など64勝を挙げ、リーディング(獲得賞金順)13位と一気に頭角を現します。

今年の本馬でサンクルー大賞を制して初のG1タイトルを手にするなど、11月17日現在、492戦76勝、獲得賞金1,737,114ユーロ(約2億1,180万円)でリーディング6位と、初のトップ10入りを濃厚にしています。なお、今年のマルセルブーサク賞をタイガータナカで制し、女性初の仏G1勝利騎手となったジェシカは、実妹にあたります。

今年には主にピエールシャルル・ブドー騎手が騎乗していますが、同じようにイタリアからフランスに軸足を移したクリスチャン・デムーロ騎手は厩舎との結び付きも強く、ウェイトゥパリスにはそのキャリアの半分近い17回騎乗しています。

● 騎手：ミルコ・デムーロ (Mirco Demuro)

本会所属騎手のため省略。